
幻想の白い花～或る貴婦人の肖像～

百日紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想の白い花〜或る貴婦人の肖像〜

【Nコード】

N1516BA

【作者名】

百日紅

【あらすじ】

「このままで、本当にいいのか？」

美貌も才能も野心もあるが、下級貴族というだけですべての可能性を閉じられた娘・マリーテレーゼに名門侯爵家の麗しき次期当主はある計画を持ちかける。

それは、彼の義妹となり侯爵令嬢として、かの家の政敵である男に嫁ぐというものだった。

一方、すべてを承知し権力への思惑を秘めながら王族に連なる誇り高い公爵はマリーテレーゼを正妃として受け入れる。

夫と義兄。熾烈な権力闘争の渦中に飛び込んだマリーテレーゼが選んだ道は・・・。

現在に至る、少しだけ前

数年振りに再会した親友は、別れた時とほとんど変わっていないなかった。

同性のオレの目から見ても非の打ちどころの無い完璧な容姿に、そこに在るだけで他を圧倒する清冽なオーラ。

あまりに変わらないその姿に、オレは一瞬、この祖国を離れていた数年間などなかったような錯覚に陥る。

しかし、オレがリーフェンシュタールを離れていた間、オレに告げる事など何も無かったとでも言いたげに取り澄ました表情を見た瞬間、オレを襲ったのは懐かしさではなく目の前の、親友だった男に対する猛烈な怒りだった。

振り上げた拳を、ソイツは避けるそぶりすら見せなかった。

ガッ……！

殴った拳がジンジンと痛む。

だが、オレは僅かに血の滲んだ拳を握り締めたまま立ち尽くした。
……もう一度、ソイツの胸ぐらを掴んで引きずり上げ、その綺麗なツラに思い切り拳を叩き付けたいという衝動を必死に抑えながら。

力任せに殴られた勢いで、バランスを崩し緋色の絨毯の上に膝をつ

いたソイツを見下ろし、オレは言った。

「何でだ………?」

「……………」

切れた唇から零れ落ちる血を、白い手の甲でゆっくりと拭い、ソイツは無言で立ち上がる。

その極上のサファイアのような青い瞳に何の感情も浮かんでいないのを認めて、オレはそれまで怒りで血が上りきっていた頭が、すつと冷えてゆくを感じた。

「お前のことを、信じていたよ。……お前なら、絶対にアイツを幸せにしてやれると思ったから、オレはこの国を……アイツの傍から離れたんだ。オレじゃあ……アイツを幸せにできないからな。」

オレは自嘲する。

そう。

グラーツ上級学院時代に出会ったアイツにオレは恋していた。アイツが幼い頃に引き離された腹違いの「妹」だと知った時はもう既に手遅れ。

妹だと知っていても一人の「男」としてしかアイツを見られないくらい、オレはどっぷりアイツへの恋情にハマっていた。

アイツがオレを選んでくれたのなら、神に叛く禁忌を犯すことになったとしても、絶対にアイツの手を離したりはしなかっただろう。けれど。

アイツは禁忌云々以前に、大人の事情が何であれ、幼い頃無情に手を離れた拳句記憶から綺麗に自分を消し去ったオレを、けして許そうとはしなかった。

「・・・・・・・・・・ライン。」

昔の学友という立場では、もう並び立てないほど、この国の中枢を担う重要人物となったかつての親友が、透明な視線をオレに向ける。

いきなり執務室に飛び込み、突然喚き出して部屋の主を殴ったかと思えば、その後急に黙り込んでしまったオレ。

端から見れば、とても正気とは思えない行動を取ったオレをどう扱ったものかと思案しているような神妙な顔つきで、親友だった男が慎重に声をかけてきた。

そこで、オレは自分の滑稽さにようやく気づいた。

アイツは、頭の良い女だった。

そして、誰よりも誇り高く、それ故に孤独だった。

底知れない孤独を埋めるように、あらゆるものに真摯に対峙し努力したアイツは、兄のオレが言うのもなんだけど、最高にイイ女だったんだ。

そんな女が、いくら窮地に瀕しているからといって一度は手酷く拒絶した異母兄に縋ったりするだろうか？

リーフェンシュタールの政変事情を聞き及び、妹の身を案じていた矢先に届いた彼女からの「手紙」。

その衝撃的な内容に思考を停止させたまま、気がつくともオレは祖国行きの船に乗っていた。

そして王都・ツエルナーに着いたその足で、アイツを任せた男の屋敷へ駆け込み、現在に至るってわけだ。

でもな。

落ち着いてよく考えてみる。

確かにアイツは、オレに手紙を書いた。

そして、その手紙を読めば、オレが何が何でもここに戻ってくることを予想しただろう。

それくらいの計算は容易くできる、頭の切れる女だった。

だが、それは自分自身の為か？

アイツを結果的に最悪な場所へ追い詰めた男を自分に代わってオレ

に詰り殴らせる為にやったことか？

答えは否、だ。

アイツは、自分が助かるために誰かの慈悲に縋るような無様な真似をするくらいなら潔く最悪の結末を選ぶだろう。そして、どんな結果にせよ自分で選んだ道であるなら、泣き言一つ零さず黙って散るだろう。

思い出した。

アイツはそういう女だ。

オレは、口元に血を滲ませて立ち尽くしている目の前の男に、胸ポケットに入れていた手紙を差し出した。

何度も読み返し、焦燥のあまり握り締められた手紙は、元は高貴な貴婦人のものでらしい綺麗な透かし模様の入った薰り高い繊細なものだったが、今ではとうにその面影を失っていた。

丁寧に折りたたまれた手紙を無言で受け取り、カサリと開いた男はその筆跡に気づき微かに瞠目する。

「アイツからの、手紙さ。……確かにアイツは、いろいろ問題のある女だったけど。……そこに書いてあることがアイツの真実なんだと、オレは信じてる。」

オレの意図が解らない、とでも言いたげに視線だけをこちらに向け
た男に、オレは噛んで含める様に言い聞かせた。

「アイツは、お前に『愛してない』って言っただろ？同じようにき
つとあのヤローにも最後には言ったはずだ。『愛してない』って。
でもさ、それはアイツなりの誠意であり愛の告白だったんだよ。素
直に自分の心を表現するには、アイツはあまりにも孤独に慣れすぎ
たんだ。」

話しながらも、ようやくまともに回転し始めたオレの頭脳が、アイ
ツの意図を明確に浮き彫りにしてゆく。

これは確信。

アイツは、アイツなりに導き出した自分の「存在意義」を守るため
に、オレをリーフェンシュタールと呼んだ。

だからオレは、アイツの兄としてアイツを愛する一人の男として、
アイツの最後の希望を叶えなくちゃいけない。

それが、アイツの本音を　恨み言さえも　最後まで聞こうとも
せず、とつと尻尾巻いて逃げ出した馬鹿なオレのアイツへ出来る
唯一の償いだから。

執務室の大きな格子窓から差し込む光に輝く金糸のような淡いブルンドをわずかに乱れさせたまま、ソイツはじっと手紙を読んでいた。白い紙に綴られた黒い文字を追う瞳、微かに震えるしなやかな指先から、隠しきれない動揺が透けて見える。

さっきまでの、等身大の人形のように静謐な佇まいが嘘のようだ。

馬鹿だな。

結局、お前もアイツ……マリーテレーゼという女の真実を見抜けなかった一人か。

後悔したって遅い。

あんなイイ女にお目にかかることはそうそうないし、そんな女を手にするチャンスはもつと少ないんだぜ。

お前は、その両方の機会を目の前にしながらどうせ目先の利を追うことに夢中で、テレサの本心なんて気にも留めなかったんだろう？

本当に、なんて馬鹿なんだ。

お前が、お前の姉さんを亡くしてからどんどん変わっていったことは解っていたけどな。

オレの大事な妹をこんな目に遭わせるくらい腐っていると知ってたから、どんなことをしてもアイツをこのどつしよつもなく閉鎖的で

絶望的な国から連れ出したのに。

コイツばかり責められない。

オレだって、この手紙が来るまで何一つ解ってなかったんだ。

いや、正直、判りたくも無かった。

だってそうだろ？

自分を拒絶した女と、その女が近づくことを許した男たちが彼女を腕に抱く姿なんて誰が見たいと思う？

結局、そんなオレの狭量と臆病さが祟って、オレは大切なものを失ったんだ。

テレサのこと。

ユーリのこと。

カールのこと。

そして、どうしようもなく臆んでしまったこの国のこと。

それ以上拒絶されるのが怖くて、すべてを切り捨てたオレは、「信じてる」という言葉を免罪符になにもかかもを目の前の親友に押し付け自分一人だけこの世界から逃げ出した卑怯者だ。

手紙を手にしたまま動かない端正な男に、オレはここに来て初めてまともに向き合った。

「……………すまねえ。」

素直に頭を下げたオレに、もの凄く意外そうな表情で顔を上げた男。オレは苦笑するしかなかった。

数年ぶりに顔を合わせたかと思ったら、挨拶代わりに殴られたり詰られたりだもんな。その反応も無理ないか。

考えたら、コイツもいろんな意味で散々だよな、と思うと妙に笑えた。

まあ、大抵はコイツの自業自得だから同情はしないけどな。

「なあ。話してくれないか？お前の知っていること。…話せることだけでいい。……教えてくれよ、アイツのことを。」

そう。

オレは自分の犯した過ちを償うためにも知らなければならぬ。

この空白の数年間に何が起きたのか。

オレの愛する女がどんな風に生き、何を選択したのか。

話してくれよ、ユーリ。

オレの知っている中で最も美しく、最も気高い女。

オレの最愛の妹。

「マリーテレーゼ」のとき。

追憶 1

誰にでも、思い出したくもない忌まわしい思い出というものがある。

「家へお帰りなさい。……………彼女は貴女に会いたくないそうです。」

石造りの薄暗い部屋で、一人待たされていた少女に告げられた言葉は無情なものだった。

少女……………金色の髪に深い湖のような青緑の瞳をもつ、まだ幼いがそれでも見る者を魅了する完璧な造形をした少女は、白と黒の尼僧服に身を包んだ壮年の女性をじっと見上げた。

物言わぬ少女の大きな瞳に何を見たのか。

尼僧は、それまでの取り付く島もないような態度を少しだけ和らげ少女の小さな手をとった。

「貴女のお母様は、世俗から離れ神に仕える身。どんなことがあっても、決して貴女に会うことはないでしょう……………貴女には、きちんと御両親がいらっしゃるはず。その方達を本当の御両親と思ひ、もうけてここへ来てはなりませんよ。」

実母を慕い、遠くからこの辺鄙な修道院へたった一人で訪ねてきた幼い少女にとって、それは随分厳しい言葉だった。しかし、同時にそれは少女を不憫に思つての、尼僧なりの精一杯の優しさでもあった。

下手な期待を持たせ続けることの残酷さを、彼女はよく知っていたから。

修道院の出口の扉の前まで導かれた時、それまで俯きひたすら沈黙していた少女が、ようやく声を発した。

「お母様は、わたしのことを……何か仰っていましたか？」

その声はあまりにもか細く頼りなげで、そこが人通りの多い往来であれば到底聞き取れぬほどの小さな響きであったが、幸か不幸か少女が立つ場所は人気のない整然とした修道院であったから。少女の問いは、尼僧の耳にはつきりと届いた。

尼僧は、少女に気取られぬよう、そつと溜息をつく。

目の前の少女にどこか似た面差し若い尼僧は、顔色一つ変えず彼女に言った。

あの娘は生まれてはならなかった罪の子。その生を誰にも祝福されることのなかった、呪われた存在。……そんな子供に、どうして今更会いたいと思うでしょう？

少女の母親は面会どころか、少女を自分の「子供」と認めることすら拒んだ。

だが、尼僧はその事実をそのまま少女に伝えることが出来ず答えあぐねた。

拒絶される恐怖に震えながら、それでもいまだ母親の自分への愛情を諦めきれずに仄かな希望を、白昼のアレキサンドライトのような美しい瞳に宿している少女に。

どうして告げることができよう。

実母の、あの残酷すぎる言葉を。

だが、年齢よりもずっと聡い少女は傍らを歩く尼僧の重々しい沈黙からすべてを悟ってしまったらしい。

人形のように愛らしい顔を白く強張らせたまま、少女がそれ以上何かを問うことは二度となかった。

「貴女に、神のご加護を。」

別れ際、尼僧は少女の祝福を心から祈った。

貴族の娘らしい愛らしいフリルが幾重にも縫い込まれた水色のワンピースは、けして安物ではない。

……大切にされている。それが容易に判るくらいには、少女の身なりはきちんと整っていた。

このまま、実母のことなど忘れて優しい養父母のもとで幸せになれ

ることを尼僧は祈った。

重い扉が閉ざされる。

おそらく、この扉が少女のために開かれることは二度とないのだろう。

そして、少女がこの場所を訪れることもけして……。

「神様なんて、いないわ。いたとしても、『神はすべての人を等しく愛している』なんて絶対嘘よ！」

少女を拒むように完全に閉ざされた扉の前で、少女はポツリと言った。

自分は一体、何を期待してここへ来たのだろう。

感動の再会を期待していたわけではない。自分を手離したことを謝罪して欲しかったわけでもない。

ただ……。

ただ一言。

「貴女のことを、忘れたことはなかった。」

そう言って、ほしかった。

一度でよいから、抱き締めて欲しかった。

それだけだった。

それは、欲張り過ぎる要求だったのだろうか？

実母にとって自分は、この世に産み落としたことを後悔するだけの会う価値もない存在だったのだろうか？

ワンピースの裾を握り締め、少女は泣くまいと歯を食い縛った。

それでも、喉の奥から涙とともに嗚咽が込み上げる。

養父母に引き取られる前。

いつも一緒に居て少女と遊んでくれた兄もまた、あっさりと彼女の前から消えた。

「泣くなよ。きっとすぐにまた会えるから。」
離れるのを嫌がり兄の服を握って泣く少女に困ったように笑いかけ、羽根よりも軽いそんな言葉を残して。

だが少女はその言葉に縋った。

いつか兄が迎えに来てくれるのだと信じてずっと待ち続けた。

やがて気づく。

あの時の兄の言葉が、少女を自分から引き離すための方便にすぎなかったことに。

養父母に不満があるわけではなかった。

むしろ、彼らは少女を実の娘のように大切に愛してくれている。

だからこそ、不安だった。

直接的な血の繋がりのない養父母にそんなにも大切にされる価値が自分にあるのだろうか、と。

実の父に捨てられ、兄からも見放された。

血の繋がった肉親に愛されない自分には何か欠陥あるのではないかと。そのことで、いつか養父母の愛さえも失ってしまうのではないかと、少女は常に怯えていた。

だから、実の母親を捜した。

そして、会いたかった。

会って、確かめたかった。

自分が、けして「必要のない」人間ではないことを。

だが、現実には少女の最後の希望を粉々に打ち砕いた。

「……………わたしは、『いらない』人間なのね……………」

輝くアレキサンドライトの瞳から零れる透明なしずくが、少女の足元に咲く雪割草の小さな白い花の上に落ちて弾けた。

まだ風の冷たい早春の出来事だった。

それは少女……「マリーテレーゼ」を凍らすのには十分すぎる、思い出すのも忌まわしい辛すぎる記憶。

「準備は出来たかい？」

ノックとともに、淑女が控える黄金で装飾された白い扉を開けた。「理想の貴公子」まさにその形容するに相応しい美貌と気品を備えた青年は、バロック調の装飾が施された大きな鏡の前に立つ少女を見て、満足そうに微笑んだ。

「素晴らしい。『女神のような』という形容はまさに、今日の君のためにあるようなものだ。完璧だよ、テレサ。君の美しさと教養、気品を前にして、我がシユタイアーマルク家にふさわしくないなどと言える者などいるまい。」

結い上げたハニーブロンドの髪にはダイヤモンドをあしらった華奢な髪飾り。そのしなやかな肢体には、わざわざ花の都・ハースから取り寄せたという白を基調にした品のよいドレスを纏い。

下品にならぬ程度にあいた胸元と白い耳朶、華奢な手首を飾るのは、御揃いであつらえられたオパールと金細工のネックレス、イヤリング、腕輪だった。

そして、薄く化粧をのせた若々しい美貌は彼女を飾るどの宝石よりも玲瓏とした光を放っている。

ユリウスが彼女をして「女神」を表するのはけして大げさなことではないだろう。

実際、豪奢な部屋で贅沢な家具を映す大きな鏡の前に立ったマリ―テレ―ゼは、知性と美貌、品位を兼ね備えた非の打ちどころのない貴婦人だった。

そして、黒いタキシードに身を固め白絹のタイを見事なサファイアのピンで留めたユリウスもまた王国で五指に入る名門侯爵家の嫡子の名に恥じぬ「完璧」な貴公子だった。

そんな貴公子が、突然少女の前に立つと優雅に膝を折り少女の白魚のような手を恭しく取る。

「ユリー様？」

青緑の瞳が訝しげに見下ろしているのも構わず、ユリウスは自身の白手袋に包まれた手の上に重ねられた少女の繊細な手にそっと唇を寄せた。

シャンデリアの光が青年の袖口を飾るルビーのカフスに反射し、驚きに瞠目する少女の瞳を射る。

「……………何のつもりですか？」

警戒するようなマリーテレーゼの声音に、ユリウスは苦笑しながら立ち上がった。

「別に。深い意味は無い。ただ、美しい貴婦人に対する最高の礼をとっただけなのだ。……………どうやらお気に召さなかったようだ。私は、君に敬意を持って挨拶することもできないのか？」

どこか揶揄するようなユリウスの声に、マリーテレーゼは疲労を隠さずに答える。

「そういう意味でないことは、お解かりのはず。……………すみません。これからのことを考えると、緊張してしまっ……………少し、気が立っているようです。」

青白い顔の少女を見遣って、ユリウスは僅かに溜息をついた。

「緊張するな……と言つても。無理もないか。今宵は君の人生が大きく転換する日だ。」

「……ええ。」

「だが、心配しなくていい。君のことは、必ず私が守る。そうであるならば、ラインに申し訳が立たない。」

「……。」

黙り込むマリイテレーゼの心の内をどう捉えたのか、ユリウスは部屋から見下ろすことのできる、シュタイアマルク邸の優雅なシンメトリックのスロープを支えるゴシック様式の列柱とその奥にある正面玄関へ視線を向けた。

夜だというのに、昼のように明るい大広間。鳴り響く管弦楽。

開かれた正面玄関の扉から漏れ出す光の中へ次々と吸い込まれてゆく、着飾った男女達。そのどれもが、この国を代表する貴族・実業家・高級官吏ばかりであることをユリウスは十分承知していた。

「見たまえ。我がシュタイアマルク家の『新しい娘』を歓迎するために、こんなにも著名な人々が集まってきている。君の、新たな人生の門出としては最高の夜ではないか？」

「見て、値踏みする為でしょう。『歓迎』する為に来た人など、きつと一人もいないわ。」

どこか遠い目をして、ユリウスの隣に並び窓の外を眺めるマリイテレーゼ。

そんな彼女を逃がすまいとでもするように、少女の細い両肩に手をのせユリウスは静かに宣告した。

「だからといって、それが何だ？君は誰よりも美しい。どんな女も君の前では霞んでしまうだろう。君に足りないものは、『身分』それだけだった。だがそれも今宵、解決する。」

「貴方の義妹になることによって、ね。」

どこか刺々しい少女の言葉を見無視してユリウスは続けた。

「君は、私の妹になることによってこのリーフェンシュタール社交界一の華になる。」

「・・・貴方が用意してくださる最高の『夫』にふさわしい、ね。」

答える代わりに、ユリウスは鮮やかに微笑んだ。

夜の窓に映る、「世の中の醜いもの」など一切知らぬような穢れのない美しい微笑み。

その「理想」の王子様のような容姿と綺麗なものしか映していないようなサファイアの瞳をもつ青年の中に、実は人の悪意や嘲笑を見慣れたはずのマリーテレーゼでさえ戦慄するような狂気と酷薄さが隠されているということを知ったのはいつの頃だったか。

マリーテレーゼは、ユリウスがこの危険な計画を自分に持ちかけてきた時の言葉をよく憶えていた。

追憶 2

選ばれし名門氏族の子女だけが入学を許されるリーフェンシュター
ル最高峰の教育機関・グラーツ上級学院。

優秀な生徒の中でも群を抜いて優秀な生徒だけが集められた、学園
自治を担う役割をも持つ特別練の執務室。

とても学生に充てられたとは思えない豪華で広い部屋で偶然二人き
りになった侯爵家の嫡子であるユリウス・フォン・シュタイアーマ
ルクと彼を補佐する男爵令嬢、マリーテレーゼ・フォン・ヒルデブ
ラント。

淡々と作業する手がふと止まった昼下がりの静寂の中で、すべてが
始まった。

「君は、このままで良いのか？」

手にした書類にサインしながら、世間話でもするよう口調で突然切
り出してきたユリウスの意図が判らず、じつと青年を眺めていると、
いつまでも答えない少女に業を煮やしたように彼はもう一度口を開
いた。

「君は、このまま普通の貴族の娘……男爵家の娘が送るよう
な人生で満足できるのか、と聞いているのだが。」

普通の男爵家の娘が送るような人生 遠まわしであるが、そ
れは爵位目当ての金を持った平民と結婚するか、同じくらしい家格

の息子と結婚するか。つまり、大した身分もない男の妻として平凡に一生を終える、ということの意味していた。

ユリウスの言葉の意味を正確に理解し、マリーテレーゼは溜息をついた。

「他に、わたしに選択肢があるとでも？」

身分差の隔たりが昔ほどなくなっただといっても、このリーフェンシュタールではいまだに特権階級意識が強く、既得権益もすべて特権階級の人間が握っているのが現状。

しかも、この国は大陸の国々に比べると女性の地位は圧倒的に低い。そんな中で、しがない男爵家出身・・・しかも養女であるマリーテレーゼが「上」へ上るチャンスなどあるはずがない。

彼女を取り巻く事情を充分理解しているはずのユリウスの口からそんな問いが発せられること自体随分失礼なことだと、些か傷つきながらもマリーテレーゼは気丈に目の前の青年の端整な顔を睨みつけた。

「誤解しないでくれ。私は、君を貶めるつもりでこんなことを言っただけではない。」

書きかけの書類の上にペンを置き、顎の下で手を組むとユリウスはじつとマリーテレーゼを見据えた。

「それでは、どういう理由か、お聞きしても？」

「勿論だ。・・・この際だから、はっきり言おう。私には君が

必要だ。」

「……………え？」

一瞬、高鳴った少女の心は、しかし次の瞬間無残に切り裂かれた。

「君の知性と美貌は武器になる。私には理想を実現させなければならぬ義務がある。そのためにはテレサ。君の力が必要だ。」

ユリウスが口を開く度に心が冷えてゆくのが分るのに、マリーテレゼにはどうすることもできない。

「わたしに何が出来ると？ ユーリ様の理想は御立派だと思いますが、その実現のためにわたしがお役に立つことがあるとは思えません。」
震える指先を気取られないよう、書類をトントンと机の上で揃えることで必死に誤魔化しながらユリウスの申し出をかわすマリーテレゼ。

思いがけず期待してしまった反動だろう。気を抜くと泣きそうになる自分がみじめで恥ずかしくて。できることならその場を飛び出してしまいたいという衝動を理性を総動員して抑えながら。

「あるのだよ。そしてそれは、君にとってもけして悪い条件ではないはずだ。」

少女の心を踏みにじっているとは露とも知らず、ユリウスは淡々と言葉を紡ぐ。

「女性がこのリーフェンシュタールで成り得る、最高の地位を君に勿論、王妃は無理だが『権力』という意味では単なる飾りの王妃などよりずっと『力』を有効に行使できる場所。君の能力を最も活かせる地位だ。」

ユリウスの声が遠い。

マリーテレーゼは温度を失ってゆく心とは裏腹に、冷静に自分を分析していた。

わたしは自分で思っていたよりも、ずっとこの人のことが好きだったのだわ。

それをこんな形で自覚させられるなんて、なんて皮肉なのだろう。

マリーテレーゼは泣き笑いのような微笑を浮かべて人形のように透明な玻璃の輝きを放つユリウスの碧い瞳に問うた。

「それで協力すると言えば、その場所までユーリ様がわたしを導いてくださるとでも？」

「ああ。当然だ。そうなれば、君は私にとって最も大切な人となるだろう。」

「大切？ライン様よりも？」

悲鳴を上げる心を巧妙に隠し、あくまで軽い口調でマリーテレーゼは会話を続けた。

だが、ユリウスの表情は真摯だった。

「そうだ。．．．ラインはこんな私を許すまい。だが、君ならば解るはずだ。失うことを知っている．．．神を疑い、憎んでいる君ならば。」

「．．．．．。」

重い沈黙が、二人を支配する。

「．．．．．その、わたしにふさわしい場所とは？」

先に口火を切ったのは少女の方だった。

それは、マリーテレーゼがユリウスの企てに加担するということ在意味しているということを両者は暗黙のうちに了解した。

「．．．．．あの男の隣だ。」

残酷ささえも美の一部となる端麗な顔が向いた視線の先を追うと、執務室の窓から見える中庭には、親衛隊に囲まれた紫紺のいと高貴なる人がいた。

ユリウスと常に学園の首席を争う優秀な学園自治執行部の一員であり、王位継承権を持つ名門エスターライヒ公爵家の嫡男。カールハインツ・ディートハルト・フォン・エスターライヒ。王族に連なる血の証明であるアメジストの瞳と夜空のような深い藍色の髪を持つ見目麗しい青年。

「・・・カール様？」

予想だにしなかった突飛すぎる発言に、啞然としながら眼下の中庭を横切ろうとするディートハルトを眺めるマリーテレーゼに、ユリウスは静かに自らの奸計を語り出した。

「そう。君には、カールの妻になってもらいたい。勿論、愛人ではなくあくまで正妃だ。そのためにまず、君には我がシユタイアーマルク家の養女になってもらう。」

マリーテレーゼはユリウスの意図をおぼろげながら理解した。

彼は知っているのだ。

自分の「理想」を実現するための最大の邪魔者としていずれ必ず彼の前に立ち塞がるのが、ディートハルトであることを。

だから、いざという時の切り札としてディートハルトの側近くに自分の息のかかった者を置いておきたい。手を組むか叩き潰すかは状況に応じて如何様にも。

そのためには、使いようによっては、盾にも矛にもなる切り札が必要だった。決定的に彼より優位に立つための札が。

しかしディートハルトもまた、ユリウスと双璧をなす切れ者である。身分も才能もこれから手にするであろう権力も拮抗している。

血筋、という点においてはユリウスを遙かに上回る彼は、おいそれと隙など作るまい。

そこで、マリーテレーゼの存在が必要になってくるのだろう。

しかし……。

「シユタイアーマルク家の皆様が、私を養女にすることを承知なさいますでしょうか？それに……。確かに、シユタイアーマルク家であれば婚家としてエスターライヒ家にとつても不足のない相手だと思えますが。運よく縁組が結べたとしても……。カール様が私を側に近づけるとは思えません。」

少女の指摘したことは、すべての的を射たものだった。

しかし、ユリウスは動じない。おそらく、彼の中ではすべてが計算済みなのだろう。

その証拠に、頭脳明晰な名門学園の首席は、少女が提示した疑問によどみなく答えてみせた。

「君は、今は男爵家の娘だが、本当はラインの妹……。ヘルムホルツ子爵の娘だ。そして、正妻ではないが母親もまた、さる侯爵家の流れをくむ貴族の娘。ヘルムホルツ子爵は私の父とも仲が良い。それに、かの家は子爵家の中でも歴史ある名家だ。血筋的にんら問題はないだろう……。何より……。君は私の亡くなった姉に似ている。おそらく、私の両親は君を一目で気に入るだ

ろつ。」

「次に、カールのことだが。エスターライヒ公爵家との婚姻は私と父で何とかしよう。君は、その月の女神のごとき魅力で、カールの心の隙に入り込むのだ。……彼の妻として公妃として、信頼され愛される女性に。」

カールハインツ・デイトハルトに愛される女？

それは、この国を影で動かしながら同時に腐らせていると云われている国王の寵姫になるよりも困難なことのようにマリーテレーゼには思えた。

そもそも彼は、女に惑わされるような情弱な人間ではない。

最高の名家に生まれ、幼少より帝王学を叩き込まれたという生粋の貴族であるデイトハルト。

19という若さにして、すでに王者の貫禄と近寄り難い高貴なオーラを放つかの青年の、確固たる信念を秘めた彫刻のように伶俐な美貌を思い浮かべ、マリーテレーゼは思わず首を振った。

「わたしに、できるでしょうか？」

デイトハルトの去った中庭を見つめるアンネローゼに、オルフェレウスは力強く頷いた。

「君ならできる。いや、君しかできないだろう。」

「ユーリ様。」

「なんだ？」

「そうすればわたしは、ユーリ様にとって『必要な』人間になりますの？」

その言葉に、ユリウスは困惑したように瞳を揺らした。

「何故そんなことを？君は、今もこれからも私にとって、なくてはならない人だというのに……。信じてくれ、テレサ。たとえばどのような事があるうとも、私が君を見捨てることは絶対に有り得ない。」

「……そうですか。」

それは、ユリウスにとっては何の意味もない空虚な言葉だった。だが、マリーテレーゼには人生を決する重大な言葉だった。

「わたし、やってみます。ユーリ様の『理想』のために。そして何より、わたし自身のために。」

その果てにあるのが、破滅だとしても……

それからは、マリーテレーゼにとって怒涛の日々の連続だった。

ユリウスは何もかもをあらかじめ準備していたのだろう。

マリーテレーゼの承諾を得たとたん、すぐに事は動き出した。

マリーテレーゼは、自分を育ててくれた養父母の気持ち慮って、シュタイアーマルク家に入るのはせめてグラーツ学院を卒業してからと望んだ。

しかし、先を急ぐユリウスはそれを許さなかった。

マリーテレーゼが上流貴族の空気になじむためには、養子縁組を結ぶのは早ければ早いほうがいい。

それに、デイトハルトが同じ学園にいる間に事を進める方が何かとユリウスにとって都合が良いという打算もあった。

そんな思惑もあり、学園卒業目前にして少女はマリーテレーゼ・フオン・シュタイアーマルクとなる。

書類上ではすでに、彼女はユリウスの「妹」となっていた。

そして、いよいよ今夜が、貴族の中でもさらに選ばれた上流階級の人間のみが集う上流社交界へマリーテレーゼが踏み出す決戦の舞台であった。

ここで、社交界に認められれば、彼女は名実ともにリーフェンシュタールの名門一族「シュタイアーマルク」の一員となる。

「さあ、行こうか。皆が待っている。」

優雅に差し出された手に、マリーテレーゼは静かに己のそれを重ねた。

「覚悟はいいね？」

控え室を出、大広間へと少女をエスコートしながらユリウスが確認するように低く問うた。

その問いの裏には、「今なら逃げてもいい」という彼なりの最後の優しさが込められていた。

しかし少女は躊躇うことなくコクリと首を縦に振ることで自らの退路を断った。

「そうか。」

長い睫毛を一度伏せると、ユリウスもまた覚悟を決めたように前を

見据え、可憐さと危うい艶やかさを併せ持つ美しい「妹」を連れ長い回廊を歩き出す。

犀は投げられた。

あとは時の流れに任せるしかない。

数奇な生い立ちを持つ少女は、こうして天使のごとき美貌の青年に導かれ運命の舞台へと足を踏み出したのである。

追憶 3

ユリウスの「計画」通りにシユタイアーマルク家に入ったマリイテレーゼに、デイトハルトとの婚約が正式に決まったという報告がもたらされたのは、彼女がグラーツ上級学院を卒業して一年を過ぎた頃。

新緑の鮮やかな6月上旬のことだった。

ユリウスの王立大学への進学に伴い、マリイテレーゼもまた居を大学のある王都・ツエルナーの侯爵家本邸に移した。

そこで彼女は貴婦人としての品位と優雅さに磨きをかけ、さらにユリウスのたつての要請により、どんな相手の会話にも卒なく対応できるだけの知識を身に付けるべく大学レベルの学問を特別に用意された家庭教師によって学ぶことになる。

勿論、それらはすべてマリイテレーゼをデイトハルト好みの女に仕立てようとするユリウスの目論見のためであったが、女性の大学への進学が許されないリーフェンシュタールにあつてさらに高みの教育を享受できることは、この国の女性には将来の選択肢が少なすぎると常々不満に思っていたマリイテレーゼにとってこの教育方針はむしろ感謝すべき僥倖だった。

だが、これらの環境がすんなりと用意されたわけではない。

ユリウスが予言したとおり、マリーテレーゼを一目で気に入ったユリウスの母親・・・シユタイアーマルク侯爵夫人は、亡き娘に似た彼女を養女にできることを素直に喜んだ。

そして、正式にシユタイアーマルク家の一員となったマリーテレーゼを実の娘のように慈しんだ夫人は、学園を卒業した彼女にさらなる高等教育を受けさせることに反対した。

夫をたてる古風なタイプの貴婦人であるシユタイアーマルク侯爵夫人にとって、それらの学問は間もなくどこかの貴族に嫁ぎ妻となり母となる娘にとって必要のないものであり、同時に、可愛い娘と共に過ごす時間を奪うだけの有害なものに過ぎなかつたのである。

「若い娘に、そんな堅苦しい学問など必要ありませんわ。そんなことを学ばずとも、テレサは十分に賢いではありませんか。」

そう言つて、頑迷に反対する夫人を説得したのは、意外にも彼女の夫でありユリウスの父親であるシユタイアーマルク侯爵だつた。

息子に似た端正な面差しの侯爵は、妻に困つたように微笑みかけながら穏やかに言い聞かせた。

「世界情勢がめまぐるしく変わつていゝ今、女性にも先を見通す見識がこれから必要になつてくるだろう。テレサを良家に嫁がせたいと思つのなら、ユーリの好きなようにさせることだ。」

物言いは柔らかだが、反論を許さない毅然とした夫の様子に、夫人はそれ以上何も言えず懔然として口を噤んだ。

こうして、シュタイアーマルク侯爵の口添えによってマリイテレーゼの教育の主導権はユリウスが握ることに決定した。だが、息子の手前なんとか夫人を説き伏せたものの、シュタイアーマルク侯爵自身はユリウスの方針に納得したわけではなかった。

心優しき父親は、新しく娘となったマリイテレーゼを妻同様愛しく思っていた。

だからこそ、親が娘の幸せを願いその望みを叶えてやりたいと思うのは当然であろう。

彼が息子の方針に同意したのは、ひとえにマリイテレーゼがそうなることを望んでいたからである。

勝気で、向上心のある娘だ。できることなら彼女も大学へ行きたかったに違いない。

侯爵に容易にそう思わせるくらいには、マリイテレーゼは十分に優秀で思慮深く博識だったし、口には出さずとも、勉学への未練が残っていることは彼女の言動の端々から窺えたから。

あまりに早く逝ってしまった実の娘・ロベルティネにしてやれなかったことを、マリイテレーゼにはしてやりたい。

その一心からの配慮であった。

しかし、侯爵は息子のやり方に疑念を抱いていた。

マリーテレーゼをシュタイアーマルク家の養女に、とユリウスから申し出があった時点で息子には何らかのよからぬ思惑があるのだろうと確信はしていた。

そしてもし、その思惑が誰かを傷つけるようなものであるのなら、許しては為らなれないと思っていた侯爵であったが、目の前に現れた娘を見て、その決心は早くも揺らいだ。

奇しくも、シュタイアーマルク侯爵夫妻の前に現れた少女は亡き愛娘が短すぎる生涯を終えたのと同じ歳だった。

金髪碧眼の容姿もさることながら、ユリウスに手を引かれ控え目に挨拶する可憐な仕草すらロベルティーネを彷彿とさせ、「シュタイアーマルク家の養女に」というユリウスの言葉を当初予定していたような即座の拒絶を示すことが出来なかった。

結果として、亡き娘を取り戻すような錯覚に陥った妻の強い後押しもあり、マリーテレーゼという美しい少女を自分の養女とする書類にサインしてしまった侯爵であったが、純粹に喜ぶ妻の傍らで、時間が経つほどに深まる不吉な予感に苛まれ、本当にこれでよかったのかと自問自答する日々が続いていた。

マリーテレーゼは親の欲目を除いても素晴らしい娘だと思う。

学園を卒業し、ツエルナーで共に暮らすようになってその想いは一層強まった。

賢く、美しく、優しい娘。

ロベルティーネにはない強さと孤独を内に秘めた娘。

ユリウスはそんな娘を躊躇いなく己の政略の道具にしようとしてい

る。

そして、「その時」は確実に近づいていた。

それが判るだけに、シュタイアーマルク侯は己の無力さが齒痒かった。

だが、マリイテレーゼをシュタイアーマルク家にとって有益な婚家に嫁がせなければ、他の一族の者が黙ってはいるまい。

そもそも、一族の大半は「男爵風情の娘を・・・」と言ってマリイテレーゼをシュタイアーマルク本家の籍に入れることに猛反対した。それを納得させたのは「彼女はきつと我が家に幸をもたらしてくれはらず」という抽象的でありながら明確に「裏」があるのだと暗に放ったユリウスの言葉だった。

その言葉が意味するところは、考えるまでもない。彼女をシュタイアーマルクにとって最も利害の一致する貴族へ嫁がせることで一族はより一層栄える、ということだ。

貴族同士の婚姻が、時には政略のために利用されることはよくある話であり、むしろそれは常識であった。

しかし、少なくともユリウスはそんな貴族の常識を嫌っていたはずなのに。

息子のあまりの変わりように不安を覚えながらも、一度下した決定を覆すことはできず侯爵は養子縁組を申請する書類にサインをした。しかし、書類をユリウスに渡しながら釘を刺すことは忘れなかった。

「ユリウス。」

「何でしょう？父上。」

「私は、テレサを不幸にするような婚姻には絶対に賛成はしない。例えお前が、どんなに強引に話しを進めても、だ。」

現当主の意思すら無視してこの養子縁組を取り纏めたユリウスの強引さを皮肉りながら侯爵は言い切った。

しかし、父親のそんな反応を予測していたのかユリウスは動揺の欠片も見せない。

「無論です。可愛い妹をあえて不幸にする兄がどこにいます。私も、彼女には幸せになってほしい。……だから、彼女には最高の相手を考えています。誰もが羨む、最高の相手を。」

「………そうか。」

妙に自信に満ちたユリウスの母親譲りの美貌を眺め、侯爵は溜息をついた。

事態は、すでに自分の与り知らぬところで転がり始めているらしい。そして自分にそれを止める力がないことを、侯爵は自覚していた。

彼に出来ることは、せいぜい息子が暴走するのを諫めることと新しい娘の幸せを祈ることだけである。

「お前の言うことが、真実であることを願っているよ。」

伶俐に輝く息子の青い瞳を正面から見据え、シユタイアーマルク侯爵は疲れたようにそう言って会話を締めくくった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1516ba/>

幻想の白い花～或る貴婦人の肖像～

2012年1月6日01時52分発行